

『現代暴力論 「あばれる力」を取り戻す』

栗原康 著 | KADOKAWA 2015、272pp.

わたしは、栗原康の名を『朝日新聞』2016年2月28日朝刊の記事「政治断簡」で初めて知った。記事の見出しは「だまってトイレをつまらせろ」。朝日新聞社政治部長は、「このところ、なにかにつけて〔中略〕脳内にこだまし、困っている」という「この言葉」を、「新進気鋭の政治学者、栗原康さんが著した「はたらかないで、たらふく食べたい」という魅惑的なタイトルの本に教えられた」と記事を書きだした。すでにおもしろい。興味をひかれ、栗原のその『はたらかないで、たらふく食べたい 「生の負債」からの解放宣言』（タバブックス、2015年）と、そのすぐあとにでたもう1冊『現代暴力論 「あばれる力」を取り戻す』（KADOKAWA、2015年）をさっそく入手した。後者には幅広の帯が巻かれ、そこに著者の近影が。けっこうイケメンか、あの「五代さま」にちょっと似てる?!。やるな栗原。帯に記された「気分はもう、焼き打ち」の大きな文字が目飛び込む。岩波、中公、ちくま、のどれとも違うイメージの新書。さすがKADOKAWA。

文体が特異、ことばがときにかろやか、でもじつはけっこうちみつそうにみえもするろんじゅつ。ただ、栗原が展開する議論の型は明瞭な二分法だ。生^{せい}をめぐる「生きたいとおもうこと (Desire to Live)」と「生きのびること (Survival)」とが峻別され、「国家の暴力」と、ひと、人びと、奴隷、「わたしたちふつうの人間が手にしている暴力」とが選り分けられてゆく。これは単純に、わるい暴力とよい暴力とを見渡すことにもなるだろう。国家は征服に始まり、征服国家はいまもあり、「国家の暴力によって、奴隷根性がうえつけられている」といわれてしまうと、ちょっと鼻白むところもある。

ただ、栗原が大杉栄を参照して示した、この「奴隷

根性」に對置可能な「自我が自我を主宰する」ということ、べつにいうと、「俺はすっかり偉くなったんだぞ」との自己認識は、わたしが調査と研究のフィールドとしている、ハンセン病をめぐる療養所とそこに生きた療養者について考えるときに、参考になるとおもう。

いまハンセン病史研究は、大きくいうと、療養所を強制隔離の抑圧施設とみるか、伝染病者にむけられた社会からの暴力に対するいくらかではあれ救護所や避難所とみるかに分裂し、そうした療養所観にあわせて、療養者を客体としてそこに配置してしまっているか、あるいは主体としてそこで活躍させるかの、描き方をめぐる狭い迷路で右往左往しているようにみえる。「自我が自我を主宰する」とは、そうした隘路のなかで1つの指針となる重要な観点だとおもう。

評／『彦根論叢』編集委員長／阿部安成

